

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K10480

研究課題名(和文) わが国におけるVaccine Hesitancyの実態解明と対策に関する研究

研究課題名(英文) Study on actual situation and countermeasures for vaccine hesitancy in Japan.

研究代表者

種市 尋宙 (Taneichi, Hiromichi)

富山大学・学術研究部医学系・講師

研究者番号：60565050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：Vaccine Hesitancyに関して、わが国における実態は不明である。ワクチンに疑念を持つ家族を対象に相談会を開催し、家族の判断因子を評価した。その結果、ワクチン添加物、ワクチン効果、副反応など多岐にわたる疑問が存在した。そして、それらの受け皿となる団体の存在も複数あった。一方で医療者側には本課題の認知が低い。全体像の評価として、ワクチン接種状況を富山市の小中学生保護者を対象に調査したところ、中学生で2.2% (90/4046)、小学生で2.6% (191/7348)がVaccine Hesitancyと考えられた。わが国でもVHは存在し、対策が急務である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで実態が不明であったVaccine Hesitancy(ワクチン躊躇)の詳細な状況を評価し、わが国でも看過できないレベルで一般社会においてワクチンへの疑念が高まっている。さらに期せずしてコロナ禍となったことで、本課題への取り組みの必要性が明確化された。本研究において、質的評価では医療者への不信感、信頼欠如がワクチンへの不信感へとつながっており、医療者側の認識変化も必要という結果であった。ワクチン効果が明確なものとそうでないものを混同して表現することは避け、信頼される情報を国民に分かりやすい形で発信する方法の検討が今後の課題と思われた。

研究成果の概要(英文)：The actual situation regarding vaccine hesitancy in Japan is unknown. The conference was held on regular basis for families with doubts about vaccines, and their determinants of the parental decision-making were evaluated. As a result, there were many doubts in vaccine hesitancy such as vaccine ingredients, vaccine effects, and side effects. And there were not few groups to accept their worries and opinions. On the other hand, Health care workers in Japan are not well aware of this issue. As an overall evaluation, a survey of the vaccination status of elementary and junior high school students in Toyama City revealed that 2.2% (90/4046) of junior high school students and 2.6% (191/7348) of elementary school students were Vaccine Hesitancy. There is certainly vaccine hesitancy in Japan, and solving this problem is a matter requiring immediate attention.

研究分野：小児救急・集中治療

キーワード：Vaccine Hesitancy ワクチン 予防接種 保健師 小児科医 ワクチン忌避

1. 研究開始当初の背景

かつてわが国は「ワクチン後進国」と揶揄され、麻疹輸出国などの不名誉なレッテルが貼られていた。しかし、この10年におけるわが国のワクチン体制の変革は目覚ましいものがあり、1歳までに施行すべき定期接種と認められたワクチンは、2000年代初頭に比較して倍増している。ワクチンギャップの解消が一気に加速した。医学的には喜ばしい一方で、臨床の場で会う機会が増えた家族がいる。それがワクチン接種を躊躇する家族、Vaccine Hesitancy である。宗教的に接種を拒否する家族、ワクチン成分やその添加物に対する疑いを持つ家族、急激な制度の変化についていけず医療に対する不信感を持つ家族など様々な理由でスケジュール通りの接種を行わない、または全く接種しない家族がいる。

すでにワクチン体制が確立されていたワクチン先進国において、Vaccine Hesitancy が近年大きな社会問題となってきている。

ヨーロッパにおいて、ここ数年ワクチン拒否の数が増加 (McIntosh ED et al. J. Pediatr 2016)、米国において、ワクチン躊躇が麻疹のアウトブレイクの原因となっている (Phadke VK et al. JAMA. 2016) ことなどが報告され、2012年以降、Vaccine Hesitancy に関する論文数は年々増加している(図1)。種々対策が講じられているが、決定的な解決は得られておらず、医療関係者さえも Vaccine Hesitancy となり、社会問題を複雑化させている。

わが国に目を向けてみると、Vaccine Hesitancy の実態は把握されておらず、表向きは社会問題にまでは至っていない。



図1

2. 研究の目的

臨床経験からもすでに実感されるところであるが、わが国における Vaccine Hesitancy の問題は決して放置してよい状況ではない。早期の医療者の意識変革と適正な対応が必要な状況と考えられる。

接種するワクチン数が増え、接種業務で多忙となり、ワクチンに関する説明が不足している傾向の現状は考えなおす必要がある。諸外国が通ってきた同じ轍を踏んでいる可能性が高い。ゆえに、本研究では諸外国で起こっている問題を参考に、まだわが国で起こっていない問題に対して早期に対応すべき学術的取り組みを多方面から検討し、アプローチを行う。

本研究の目的はわが国の Vaccine Hesitancy の問題に対して早期に評価および介入をし、諸外国で起こっているような社会問題化する前に対策を行うことである。わが国がワクチンギャップを抱えていたからこそ他国と異なった経過でワクチンが普及し、今後起こりうる可能性がある程度予測できる状況にあると考えられる。

3. 研究の方法

1) ワクチン子育て相談会による介入

公共の施設で少人数による対面式議論を基盤としたワクチンの問題を小児科医に相談する場を設定し、ワクチンに対する疑念や懸念を評価した。その上で Vaccine Hesitancy 対策としてのモデルを提示する。

2) ワクチン俗説・疑念のリストアップ

ワクチンと自閉症の関連、ワクチン添加物に対する疑念、ワクチン料金に関する疑問など Vaccine Hesitancy が抱えている不安とその情報は多岐に渡るもののある一定の傾向がある。相談会における家族からの情報共有や SNS 情報などを整理し、その代表的な項目をリストアップする。

3) 一般書籍の解析

医療関係者をはじめ一般販売されている書籍にも多くの真偽不確かな不安を助長する情報が掲載されている。家族の目に触れる可能性が高い一般書籍に着目し、大手検索サイトにおいて、「ワクチン」「予防接種」のキーワードで検索した。タイトルおよび内容から予防接種へ批判的、否定的な内容のものを検索し、上位に出てきた5冊を選択した。それらの著者背景や記載内容についてワクチンに関する論点を分類し、それぞれを評価した。

4) 医療者の Vaccine Hesitancy 対策

すでに出版されている医療関係者によるワクチン懐疑論の文献的評価(医学的検証)を行い、論点の整理を行う。また、ポリオ、麻疹、風疹、髄膜炎といった疾患について、近年は経験する機会が激減している。それらの背景をもとに Vaccine Hesitancy 対応の論点を整理し、医療関係者に対する情報提供を実施し、その反応を評価する。

5) 新型コロナウイルスワクチンと Vaccine Hesitancy の評価

本研究の実施期間中にパンデミックが発生した。その経緯の中でこれまでとは異なった経緯でワクチンが開発され、緊急で承認された。このような背景はまさに Vaccine Hesitancy の課題を表面化させた。本ワクチンへの認識、理解について、既存のワクチンとの比較を行い、評価した。対象は富山市内小中学生 11000 人以上から Web アンケートにて情報を収集した。

4. 研究成果

本研究実施以前より、これまで富山県内の 2 か所でワクチンに疑念を持った家族を対象にワクチン講演会を行ってきた。第 1 回富山市 47 名、第 2 回高岡市 21 名の参加があり、そのうち 75% の家族が何らかの定期接種を行っていなかった。結果として、97% の家族にワクチンに対して何らかの不安を感じていること、ワクチンに関する情報が不足しており、それを調べる先は SNS となっている現状が明らかとなった。8 割以上の家族が小児科医に情報源として期待していた。一方で、小児科医は「ワクチン接種を拒否する家庭は診ない」といった発言で関係が悪化し、Vaccine Hesitancy を強化している現状が明らかとなった。また、医療者が忙しそうで怖くて質問や相談ができないという意見が複数見られた。

試験的に行った調査では、3 か所の 4 か月健診会場で 92 名の来場があり、その中で 3 名 (3.3%) の未接種者が存在していた。

1) ワクチン子育て相談会による介入

コロナ禍前の 1 年間で 8 回実施した。平均参加者数は 4.1 人であった。概ね 1 時間程度の開催で、最初の 30 分弱を情報提供とし、残りを不安や疑問に答える時間とした。その中で以下のような結果が得られた。

- ・ワクチンへの不安が強かったものの 10 分程度の説明で納得し、笑顔で帰宅される家族
- ・研究者の外勤先に接種が出来たことを報告するため、わざわざ受診した家族
- ・整体師、助産師、薬剤師などがワクチン接種への疑問を「助言」している実態

・Vaccine Hesitancy 家族から他地域での開催要望あり

・相談会実施会場の管理者から別の機会における定期開催の提案とその実践 (年 2~3 回、乳児子育てサークルにおけるレクチャー)

2020 年以降は残念ながらコロナ禍となり、会場確保が困難となり、対面型の本研究は実施不能となったが、それまでの経緯で、未接種家族は本気で悩み、困っていることは明確になった。

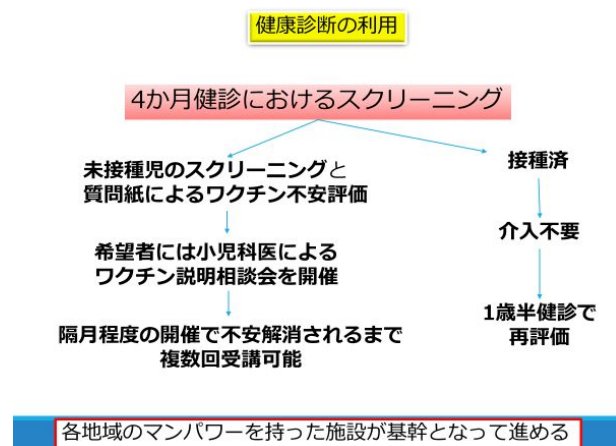
2) 子育て相談会や一般書籍の中から主な論点をリストアップした。以下に示す。

- ・ワクチンの添加物に対する不安と疑問
- ・ワクチン効果への不安と疑問
- ・同時接種への不安と疑問
- ・自然感染の方が良い
- ・罹患者がいらない疾患へ接種する意義への疑問
- ・ワクチンに劇薬と表記されている
- ・化血研が製造過程の問題を起こし、信用できない
- ・医師や保健師に強制的に言われることへの嫌悪感
- ・医師と製薬会社が儲けようとしている
- ・被害救済制度への疑念 (本当に救済してくれるのか)
- ・小児科医は自分のこどもに危険なワクチンを接種していない

これらは、それぞれ複数の保護者や書籍などで見聞きされたものである。ある程度の情報源が存在し、そこから様々な情報が付加され、表現に変化は生まれているが共通部分が多い。特に、1998 年ランセット誌に掲載された Andrew J Wakefield らの MMR ワクチンが自閉症の原因ではないかという論文のインパクトが今も根強く残っている。同論文は 2010 年、同誌によって掲載の撤回がなされているが、それによってさらに医療界の圧力として陰謀論が渦巻く結果となっている。このような背景を多くの一般医療者は知らない。それゆえ Vaccine Hesitancy との相互理解に支障を期待していることが考えられた。

3) 一般書籍の解析

著者の背景は様々であったが、近年は医師の書籍が増加していた。検索サイトにおけるおすすめ評価として 5 点満点中平均 4 点を示していた。論点に関して、子宮頸がんワクチン問題、MMR ワクチンと自閉症の関連性、製薬会社と医師の癒着、自然派志向などが多くの書籍で共通して表現されていた。共通していた点は、現代医学への批判的表現であったが、子どもたちを守りたいという表現も同様に認めた。



各地域のマンパワーを持った施設が基幹となって進める

VH 家族と意見を交わす際、科学的根拠がないにも関わらず類似した話を聞くことがしばしばある。それらは多くの場合、情報源は同一であり、その一つが一般書籍である。事実に基づかない陰謀論があたかも事実のように表現されているため、医師にとってそのような書籍をわざわざ購入し、読む機会は少ない。その一方で一般家族はそれを手にし、「子どもたちを守るため」「医療者の不正、陰謀」などといった表現から書籍の評価が高くなる。このような相互理解の解離を解決する必要がある。まずは医療者側もこのような情報を収集する必要がある。そして、なぜそのような表現になってしまうのか、科学的背景の評価はどうか、われわれ医師の言動に反省すべき点はないのかについてさらなる研究、評価が必要と感じられた。

追加記載として、2020 年以降、ワクチンに関する書籍の出版が飛躍的に増加した。コロナワクチンの影響によるものであるが、2019 年に解析した書籍を書いた多くの著者がコロナワクチンについても真偽不確かな情報を提供している。国民全体に混乱期における情報リテラシーのあり方が求められているとともに同様の人物によるワクチン懐疑論が展開されていることは注視していく必要がある。既存のワクチンとコロナワクチンの評価は分けて考える必要があり、Vaccine Hesitancy を評価する上でも注意が必要である。この点は今後の課題の一つと思われた。

4) 医療者の Vaccine Hesitancy 対策

上記のような結果を受けて、医療者に対する各地における発表、講演を積極的に実施した。多くの参加者から良い反応を得たが、一方で Vaccine Hesitancy の存在を経験していない医師の多さが目立った。これは何を意味するのか。まだわが国に Vaccine Hesitancy が少ないということを示しているのかということそれは「否」である。すでに相談会などで家族の思いを聞いている経緯から、彼ら、彼女らは医療や医療者を信頼していない。つまり母子手帳を見るなど積極的に評価しない限り、目の前の家族がワクチン接種を実施しているかどうかは分からないのである。信頼が得られない限り、相談もしてこない。ここに医療者側のピットフォールがまた一つ明確に存在する。

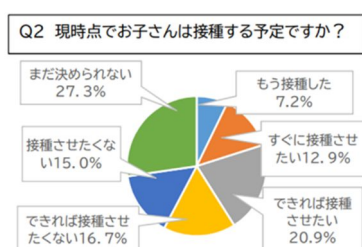
Vaccine Hesitancy が少ないという誤解を持っている医療者は今すぐに考えを改めなくてはいけない。ワクチンへの疑念を相談したくても相談できていないことの表れだからである。診療スタイルの修正が必要かもしれない。多くの Vaccine Hesitancy は専門家に相談したいという思いも持っている。そのような空気を外来診療で作り出す余裕と時間が必要と考えられた。

医療界における課題として、Vaccine Hesitancy に対する偏見である。すべての家族が医療やワクチンを否定し、全く接種をしないというわけではない。未接種ながらに不安も抱えている。未接種者の集団においてもワクチンに関する情報が不足しているという結果が出ている。そのような背景の中、医療界では Vaccine Hesitancy を「ワクチン忌避」と翻訳している状況がある。用語の持つ力は大きく、表現に問題があると思われる。すべての対象者が忌避しているわけではない。躊躇している対象者の方が多いことは本研究の調査でも明らかである。躊躇している人たちに「忌避」と表現することの危うさについて、本研究の結果として論文で指摘し、講演などを通して再考すべきことを指摘した。

5) 新型コロナウイルスワクチンと Vaccine Hesitancy の評価

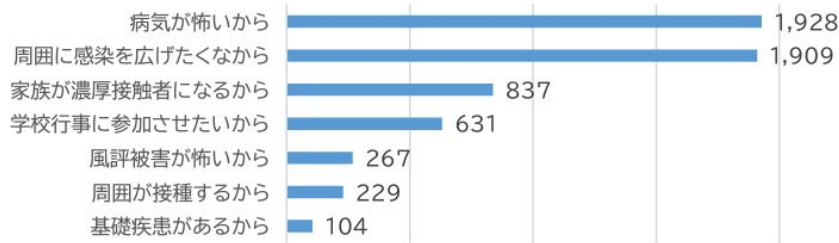
本研究の期間にコロナ禍となり、多くの研究課題が頓挫する中、Vaccine Hesitancy が大きな脚光を浴びる結果となった。コロナワクチンに対する一般社会の評価、諸外国との差異など重要な課題が新たに発生し、本研究において対応した。

2021 年度はコロナワクチンが小児へも適応拡大となり、社会全体がワクチンに対する興味が高まり、富山市教育委員会と合同で保護者へのコロナワクチンに関するアンケートを実施した。総計 11,394 人から回答を得た。ワクチン未接種者調査として、従来 of ワクチンに対して「全く接種していない」の回答は中学生で 2.2% (90 人)、小学生で 2.6% (191 人) であった。本研究における先行研究においても 3.3% という結果を過去に得ており、わが国における VH は 2~3% 程度、つまり 30~50 人に一人は存在すると推測された。



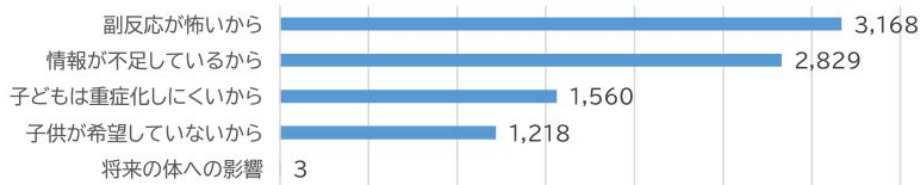
「すぐに接種させたい」、「できれば接種させたい」を選択した方への質問
 Q2-1 ワクチン接種を希望する理由は何ですか？(複数選択可)

(人)

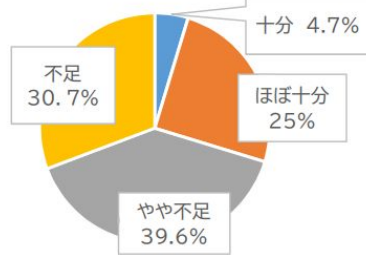


「できれば接種させたくない」、「接種させたくない」、「まだ決められない」を選択した方への質問
 Q2-2 ワクチン接種を希望しない理由は何ですか？(複数選択可)

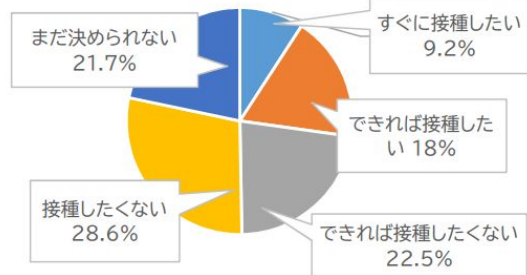
(人)



Q3 コロナワクチンに関する情報は足りていますか？



Q6 お子さん自身はワクチン接種についてどう思っていますか？



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 種市尋宙	4. 巻 9
2. 論文標題 Vaccine Hesitancyと新型コロナウイルス感染症(COVID-19)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 別冊Bio Clinica: 慢性炎症と疾患	6. 最初と最後の頁 128-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ugai Satoko, Iwaya Atsushi, Taneichi Hiromichi, Hirokawa Chika, Aizawa Yuta, Hatakeyama Shuji, Saitoh Akihiko	4. 巻 38
2. 論文標題 Clinical Characteristics of Saffold Virus Infection in Children	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Pediatric Infectious Disease Journal	6. 最初と最後の頁 781 ~ 785
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/INF.0000000000002298	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 種市尋宙	4. 巻 35
2. 論文標題 世界とわが国におけるVaccine Hesitancyとその脅威	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BIO Clinica	6. 最初と最後の頁 136-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 種市尋宙	4. 巻 22
2. 論文標題 児童の臓器提供・臓器移植を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Organ Biology	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江 貞志, 田中 朋美, 和田 拓也, 種市 尋宙, 足立 雄一	4. 巻 51
2. 論文標題 Mycoplasma pneumoniaeによる急性小脳失調症の1例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小児内科	6. 最初と最後の頁 1342-1345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hata Yukiko, Oku Yuko, Taneichi Hiromichi, Tanaka Tomomi, Igarashi Noboru, Niida Yo, Nishida Naoki	4. 巻 42
2. 論文標題 Two autopsy cases of sudden unexpected death from Dravet syndrome with novel de novo SCN1A variants	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Brain and Development	6. 最初と最後の頁 171 ~ 178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.braindev.2019.10.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種市 尋宙	4. 巻 42
2. 論文標題 Vaccine Hesitancyの考え方に関する考察 ワクチン忌避という表現は正しいのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アレルギーの臨床	6. 最初と最後の頁 215-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高崎 麻美, 種市 尋宙, 高井 奈美, 大橋 未来, 八木 信一	4. 巻 125
2. 論文標題 コロナウイルス感染症2019流行下における幼児のマスク着用状況と保護者の認識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本小児科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1581-1584
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種市 尋宙	4. 巻 1353
2. 論文標題 学校行事を復活させる感染対策と医療専門職の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保団連	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種市 尋宙	4. 巻 246
2. 論文標題 子どもたちにとっての新型コロナウイルス感染症.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 クレスコ	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山 和孝, 瓜生原 葉子, 多田羅 竜平, 種市 尋宙, 日沼 千尋, 別所 晶子, 荒木 尚	4. 巻 33
2. 論文標題 小児脳死下臓器提供11例の意思決定状況の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本救急医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 85-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺下 新太郎, 種市 尋宙, 高崎 麻美, 加藤 泰輔, 伊藤 貞則, 野口 京, 足立 雄一	4. 巻 125
2. 論文標題 MRI検査時の鎮静に関する共同提言を活用した医療安全推進のための取り組み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本小児科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1591-1597
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大山 昇一, 赤嶺 陽子, 福原 里恵, 荒堀 仁美, 石毛 崇, 石崎 優子, 伊藤 友弥, 江原 朗, 日下 隆, 種市 尋宙, 濱田 洋通, 平本 龍吾, 儘田 光和, 道端 伸明, 坂東 由紀, 金城 紀子, 松原 知代, 平山 雅浩	4. 巻 125
2. 論文標題 これからの小児科医がめざす小児保健・医療の方向性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本小児科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 540-544
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種市尋宙	4. 巻 44
2. 論文標題 【児童虐待を学ぶ】臓器提供と児童虐待	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 救急医学	6. 最初と最後の頁 1470-1475
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐 登, 村上 美也子, 宮崎 あゆみ, 八木 信一, 嶋尾 智, 種市 尋宙	4. 巻 61
2. 論文標題 HPVワクチン「積極的勧奨の一時中止」の受け止め方と接種に関する職種別意識調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児科	6. 最初と最後の頁 1341-1346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種市尋宙	4. 巻 28
2. 論文標題 新型コロナにどう対応したか 子どもたちの日常を取り戻すために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 51-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 種市 尋宙
2. 発表標題 小児科医としての働き方改革の課題とその方策 働き方改革と将来の小児医療提供体制の姿
3. 学会等名 第123回日本小児科学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 新田 雅彦, 賀来 典之, 西山 和孝, 問田 千晶, 守谷 俊, 清水 直樹, 種市 尋宙, 伊藤 英介, 中林 洋介, 太田 邦雄
2. 発表標題 子どもの救急医療をになう次世代を育成する～小児救急医療教育のこれから～ プレホスピタルの小児救急教育 内因性を中心に
3. 学会等名 第23回日本臨床救急医学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 法改正から10年を迎えたわが国の小児の脳死下臓器提供-次の10年に向けて社会が目指すべき方向とは- 脳死下臓器提供における被虐待児除外の課題解決に向けて
3. 学会等名 第48回日本救急医学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 種市 尋宙, 高崎 麻美, 寺下 新太郎, 足立 雄一, 八木 信一
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症-パンデミック下の小児科医 小児科医による新型コロナウイルス感染症の偏見・差別対策
3. 学会等名 第52回日本小児感染症学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 八木 信一, 種市 尋宙, 足立 雄一
2. 発表標題 地域クリニックにおける乳幼児呼吸器ウイルス感染症の季節性変化の推移 乳幼児のコロナウイルス感染は推測できるか?
3. 学会等名 第52回日本小児感染症学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 種市 尋宙, 八木 信一
2. 発表標題 4ヵ月健診を利用したワクチン躊躇へのアプローチ
3. 学会等名 第51回日本小児感染症学会総会・学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 子どもの臓器提供と終末期における家族支援
3. 学会等名 第15回日本移植・再生医療看護学会 学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 こどもの脳死下臓器提供の実際と課題
3. 学会等名 第35回腎移植・血管外科研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種市尋宙, 清水直樹
2. 発表標題 脳機能停止と診断され、臓器提供を望まない場合でも、一定の集中治療は提供しうる
3. 学会等名 第122回 日本小児科学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 Vaccine Hesitancyの考え方と対応 ~ ワクチン接種を躊躇する人々 ~
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 なぜワクチンを打つのか なぜそれをためらうのか
3. 学会等名 富山県薬剤師会生涯教育研修会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 なぜワクチンを打つのか なぜそれをためらうのか
3. 学会等名 富山市産後ケア応援室研修会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 種市尋宙、高崎麻美、八木信一、宮口克志、高井奈美
2. 発表標題 コロナ禍における小児科医と教育委員会の連携
3. 学会等名 第124回日本小児科学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 種市尋宙、高崎 麻美、八木 信一、辻 春江、五十嵐登、高井奈美
2. 発表標題 富山県における新型コロナウイルス感染小児を巡る包括的対応 第3報 教育と医療の連携 子どもたちの健康被害調査
3. 学会等名 第53回日本小児感染症学会総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 赤ちゃんの健康と予防接種
3. 学会等名 子育て交流広場「ままのわ」講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 種市尋宙
2. 発表標題 小児医療提供体制の「今そこにある危機」 子どものコロナ禍と今そこにある危機
3. 学会等名 第125回日本小児科学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 種市 尋宙
2. 発表標題 小児救急における脳蘇生と治療の限界について考える-脳死とは何か 子どもの脳死下臓器提供と被虐待児除外に関する検討
3. 学会等名 日本小児救急医学会総会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関